令和６年度　国語国文学科
学校推薦型選抜・特別選抜　小論文　出題の意図

問題文の出典：尹雄大（ユンウンデ）、『聞くこと、話すこと。　人が本当のことを口にするとき』、大和書房、2023年5月20日発行、引用範囲pp.225 - 228

限られた時間の中で、出題された長文を読み解きながら自ら思考し、それを論理的に表現できているかを問うものである。

1）設問の趣旨を的確に捉えているか。
2）課題の在所を把握し、適切に絞り込んでいるか。
3）具体例と関連させて説得力をもって論じているか。
4）文章を整然とまとめ上げているか。

※　この「出題の意図」についての質問及び照会には、一切回答しません。

令和六年度　山形県立米沢女子短期大学　国語国文学科

学校推薦型選抜・特別選抜　小論文　問題用紙

次の文章を読み、後の設問に答えなさい。

インタビュアーとして人の話を聞くようになって気づいたのは、ノリのいい巧みな会話に紛れてしまって当人もわかっていないようだが、感情移入と投影の違いを理解していない人の多さだった。本人は感情移入しているつもりでも、実は自分を投影しているに過ぎない。相手ではなく鏡を見ているのに等しい。そうなってしまうのは、共感することを理解だと思っているからではないか。

たとえば文化や慣習、セクシュアリティ（注1）の違いなど、少しでも共感できない出来事に出会うと「わからない」の言葉でさっさと片付けてしまう。場合によっては嫌悪感を付け足してしまう。そうした心の動きの背景には、共感によって「わかる」を積み上げれば理解できる段階に至れる、そんな偏った考えがあるのではないか。

というのも、共感できないとなると早々に切り上げてしまうとしたら、言外に表しているのは、「私は自分のこれまで知っている人や事柄しか理解しない」という態度だ。それはつまり答え合わせということで、自分の中の正解を投影しているに過ぎない。

今目の前にいる人、今起きていることといった最も新しい現実を受け取ることを拒否している。そう思うと、共感と対で用いられがちな「あり得ない」の表現が気になってくる。存在しているのに「あり得ない」と言うとしたら、その人の現実は想定の範囲にしかないということになるからだ。

もしかしたら共感はしていても本当は相手に関心がないかもしれない。互いの違いを無視しておいて、そこに「同じ」を見つけるのであれば、他人は「自分と同じもの」を見つけられたらいいだけの安心材料になっている。

感情移入はそれと違う。自分の中にあるものと自分とは異なる相手に似たものを見つけたときの「同じだ！」という驚きと喜びがある。違うのに同じところがあることに感動を覚えるわけだ。投影と移入の違いに気づけないのは、共感という言葉が多用され過ぎて麻痺（まひ）しているせいかとすら思う。

インタビューセッション（注2）において、共感は理解の道のりのすべてではないという態度で臨んでいる。先ほど「彼女たちが共感や同情を欲していないのは、最後まで話が聞き届けられた経験の少なさゆえなのだろう」と述べた（注3）。容易（たやす）く共感しないせいで、私は話の成り行きをすべて聞こうという姿勢を保つことができる。

あなたが何かを言おうとして、でもちゃんと言えているかわからないままに必死に言葉を紡いでいるとする。聞き手の相手は良かれと思い、あなたがすべてを言い尽くす前に「わかる」と言う。それは善意なのだとあなたは感じる。話を続ける。合間に挟まれる「わかる」の声に次第に情緒の色が濃くなり、湿度が高まってくるのを感じる。それは同情と呼ばれるものかもしれない。自分の話が切れ切れになり、自分の話でないように感じられてしまう。

やがて「私も似たようなことがあった」と切り出す頃には、相手はあなたの話をきっかけに自分の話をしだす。その話には因果関係があって、誰が良くて誰が悪いかが決まっている。それと似ているからきっとその話を持ち出すのだが、あなたは似ていないものを同じだと言われているように感じても、それを言い出せない。そして思う。どうして最後まで話を聞いてくれないのだろうか。ただそれだけでいいのにと。

私は話を聞く際「積極的に受け身」になることを重視している。まず相手の声や表情や雰囲気、存在が私にとってどういうものかをひたすら感覚することから始めるしかないからだ。だから、相手が話しきるのを待つ。言い淀（よど）んだり、言葉が出てこないあいだも待つ。間が空いたことに不安になって、相手の言っていることを「つまり、こういうことですか」と言い換えない。相手の言葉を奪わない。

社会では、要するに、結局、手短に言うと、それは君の主観でしょ？　根拠は？　結論から言って」といった言葉が溢(あふ)れていて、そういう言い回しを持ち出されると、たちまち自分の言葉が拙いものとして感じられてしまう。話すこと自体が萎縮させられる。

要するに」で心の内が話せるわけがない。要するにあなたの言いたいことはこういうことですね」と聡明(そうめい)な人に凄まじく切れ味のいい言葉で言われたら、一瞬はすごくわかってもらえた気にはなるだろう。嬉(うれ)しいかもしれない。でも、要せない気持ちが心の奥にあることになんとなく気づいているのではないか。

誰しもわかってほしいがわかられたくはない気持ちを抱えている。なぜなら他人と私は違うのだから、わかるはずがない。それは寂しさが募るところではあるけれど、私らしさが宿る場所でもある。本当は私という存在は私自身ですら共感できない相貌を持っている。そうであるならば、そもそもどうして私という存在が誰かに要約されないといけないのだろう。この疑問は至極当然だと思う。

そのためインタビューセッションにおいては、相手の話を要さないでそのままに聞く。共感や投影は、相手の話を自分の話として聞いている。けれども本当に話を聞こうと思うのならば、他者の声を尊重するならば、相手の話を相手の話として聞かなくてはならない。あなたという存在は私の共感の及ばないところで生きている。

出典：尹雄大(ユンウンデ)『聞くこと、話すこと。　人が本当のことを口にするとき』、大和書房、二〇二三年。出題にあたり一部表記を改変・省略した。）

注１）性自認や性的指向など、人間の性のあり方のこと。

注２）著者が二〇一七年から行っている〝普通〟の暮らしを送る人たちの声をインタビューという形式によって聞く活動のこと。

注３）出題範囲より前の部分で著者は、インタビューセッションに来る人の九割は女性であり、彼女たちが打ち明ける話の多くが、周囲の親しい人には話せなかった内容であることを指摘している。そのうえで、女性たちが身近な人にそれらの話をしないのは、共感や同情を求めていないからであり、さらになぜ共感や同情を求めないのかというと、彼女たちが最後まで話を聞き届けられた経験が少ないからではないかと考察している。

【設問一】　傍線部「『積極的に受け身』になること」とは、どのように人の話を聞くことなのか。「投影」や「共感」、「人の話を要約すること」に対する著者の考えに触れながら、二〇〇字以上二二〇字以内で説明しなさい。

【設問二】　人の話を聞くことについての著者の考え方に対し、あなたはどのように考えるかを、六〇〇字以内で論述しなさい。その際、あなたが人の話を聞く時に心がけていることや、自分の話を人に十分に聞いて貰(もら)えたと思った経験など、人の話を聞くこと・人に話をすることについての具体的なエピソードを挙げること。